

『人家必用小成』にみる江戸末期の住居について

三四

村 田 あ が

緒言

筆者は江戸時代中・後期の家相文献を中心に、住まいに関わる方位の概念である家相説の展開について継続的に研究を行ってゐる。本稿では同時代の家事の書^①である『人家必用小成』の分析を通して当時の住まいの状況を探ると共に、本書における家相説の扱いについて明らかにし、近世末の家相説のあり方を知る一助としたい。

家相説は屋敷や住居の地勢や配置、間取りや構造などが居住者の吉凶禍福を左右すると思われる説であり、近世以降広く巷間に流布した観相にかかわる習俗の一つである。特に江戸時代中、後期には数多くの家相関連文献も刊行され、住まい造りの際の禁忌や方位観、家屋建設に関わる建築儀礼、住まい方の諸注意などが家相文献によって読者に啓蒙されたことが明らかである^②。

江戸時代中、後期の家相説に関する資料としては、当該時期に刊行され、または写本として残された家相文献以外にも、同時代の随

筆にあらわれる家相関連の記述や、家屋を新築、改築する際の何らかの記録に残される記述があり、何れも客観的な資料として重要なものと考えられる。

本稿で扱う家事の書は、主に住まいの中での生活における衣食住に関わる諸注意や生活の知恵、家庭生活の心得を指南するものであるが、その中の住居に関わる記述には、家相説に関するものも見受けられる。本稿ではこれらの記述を分析することを通して、家事の書における当時の住居のあり方について考察したい。

一、『人家必用小成』について

本書は、一冊に編まれた五十五頁からなる和綴しの版本であり、角書きに「日用重宝」とある。また別名を「日用調法人家必用記」といい、国書総目録^③の分類によるところの家事の書である。天保八年（一八三七）に序文が書かれ、同年に東都書林奎文閣から刊行された。

版本には天保八年版と九年版があるが、今回本稿で底本とした東京家政学院大学図書館大江文庫所蔵の版本は、天保九年（二八三八）に刊行されたものであり、扉には「三遷先生著 不許翻刻 千里必究 人家必用記全 東都書林奎文閣梓」（図一）とある。

底本は、奥付によると東都（江戸）の日本橋南一丁目の須原屋茂兵衛、横山町三丁目の和泉屋金右衛門、通油町の鶴屋喜右衛門、日本橋南二丁目の山城屋佐兵衛、芝神明町の岡田屋嘉七、市ヶ谷尾州様御長屋下の石井佐太郎の、当時の江戸の中心地にある計六ヶ所の取次店から販売されている。

これらのうち、日本橋の須原屋茂兵衛は、地図と武鑑で売った大書肆であり、畿内で書かれた江戸時代中、後期の家相文献も江戸で販売する場合はこの須原屋を通して売り出している⁽⁴⁾。

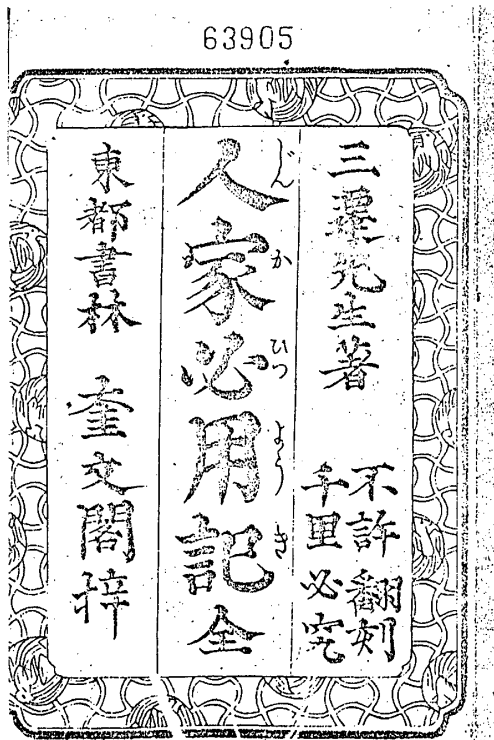


図1 『人家必用小成』扉（東京家政学院大学図書館大江文庫所蔵の版本より転載）

著者は貝原益軒の家道訓や武訓、養生訓に影響された高井蘭山である。国書人名辞典によれば⁽⁵⁾蘭山は戯作者であり、宝暦十二年（二七六二）に生まれ、天保九年（一八三八）に七十七歳で没している。名は伴寛、字は思明（子明とも）であり、通称は文左右衛門、蘭山の他に、三遷、晒我、宝雪庵と号している。江戸の芝伊皿子組屋敷の与力であるが、漢籍、往来物、女教訓書、字書などを一般庶民向けに俗解した書を多数著し、読本の作者としても曲亭馬琴の後を受けた翻訳の仕事を残している。

国書人名辞典には彼の百二十二点の著作が記載されている。生活関連の書物としては、他に寛政二年（二七九〇）の『米銭相場早見』、寛政三年（二七九一）の『年中衣裳文章』、享和二年（一八〇二）の『女重宝記』、文化六年（二八〇九）の『農家調宝記』、文化十二年（一八一五）の『保寿食事戒』と『食事戒』、文政十二年（一八二九）の『男重宝記』と『日用重宝記』などがあり、日々の生活や家事・家政に関する著作を最晩年の本書に至るまで、継続してものしていたことが分かる。

本書が刊行された天保八年は、前年から続く米価高騰の煽りを受け、大坂で大塩平八郎の乱が起き、江戸では品川、板橋、千住、新宿の四宿に御救小屋が建てられ、名主に窮民調査が課せられ、様々な窮民救済事業が施行された世相である。このような背景を反映して、本書では後に述べるように「節約」が徹頭徹尾奨励されている。

二、『人家必用小成』の構成

本書の構成は、本書を刊行した書肆の主人による序文と目次を総覧することでのその全貌が明らかになる。ここに翻刻を試みるが、紙幅の関係上、改行などは底本の通りにはせず、読みやすさを優先して句読点も入れ、旧字体は新字体に書き換えて掲載する。また、目次（目録）は全八十四項目を羅列する形で掲載する。なお表一は項目構成を表にまとめたものである。先ず序文から翻刻し、次いで目録を掲載する。

人家必用小成序

貝原益軒先生は博学多識の人なれども、名聞利達を好まざれば、専ら世を助くる有用の事のみ勤められたり。故にその著す所の家道訓、文武訓、養生訓の類、皆日用鄰近の事なれば、文雅の士或いは是をいやしむといえども、その実はことごとく有用の筋なり。

近歳は如此の学を勤むる人なく、ただ己が博学英才の名を知らせん為の述作なれば、その文訓に於いては雅言風流間然なしといえども、多くは無用の書にして徒に紙筆を費やす事、挙げて嘆くべきならずなり。

ここに三遷居という翁あり。かの益軒先生の志を継ぎて世教補益の事を集録せるもの、若干巻あり。そが中に、人家必用大

表1 『人家必用小成』項目構成一覽

(総計 84 項目)

大分類	中分類	数	小分類	細目	数	項目名		
生活	総論	1			1	儉約の大意		
	衣生活	5			5	衣類節儉心得 横麻上下折り切れざる伝 他		
	食生活	21			21	飯を炊く心得 かんぴょう早煮 他		
	住生活	13	総論			1	家作節儉心得	
			住生活管理			4	炭のたもち能き伝 棕櫚箒久しく保つ伝 燈油寒中氷らざる伝	
							煤けたる唐紙を張りてしみの出ざる伝	
			住環境整備	4	屋内		4	竈徳用向き心得 居風呂徳用向き心得 寒中新壁をぬりて氷らざる伝 住居向きの湿 気を避くる伝
						庭	4	石灯笼早く苔を生ずる伝 盆栽の木の死れか かりたるを活かす伝
								挿木の秘伝 生えにくき種物蒔きよう
	病氣治療	11	まじない		11	小児百日咳のまじない 風を引かざるまじ ない 他		
	生活一般	20	まじない		5	駕籠に酔わざるまじない 船に酔わざるまじ ない 他		
			生活の知恵		15	髭並びに月代やわらぐる方 日傘雨に遭い て壊れざる伝 他		
相場	経済(相場)	13	土木相場		2	道普請土坪積もり 新堤築立て土坪積もり		
			一般相場		11	米相場便覧 奉公人給金日割 他		

成と名付けし書あり。こは經濟にあずかる事のみ遍く編集して、かたわら日用調法せる微細の俗事に及べり。実に人家闕くべからざるの珍書なり。されどその巻数多ければ、恐らくは常人悉く見てその要を執り行うに便ならざるに似たり。

因つて今、その要用の二三を抄出して梓新せん事を謀りしに、翁のもとより世を助くるの心せちなれば、不日に功を竣て授けらる。是惟予が幸いのみならず、俗家經濟の助けならばなり。

此の書始めに經濟一斑と云う目を立てしは、かの虎豹一斑の心にて、僅かに十一を千百に在ずという謙辞なれども、其の実は經濟の道ここに外ならざるなり。庶幾は鄙近の事となして、徒に見過ごすまじと云爾。

天保八年辛酉九月

奎文閣主人謹誌

以上が書肆の主人による序文であり、本書の成り立ちを分かりやすく述べている。序文によると『人家必用大成』という書があり、これは大部なので短くまとめ直したものが本書であるというが、蘭山の経歴には『人家必用大成』は見あたらないため、一般に版本として刊行された書ではない可能性がある。

序文からは、本書が經濟一般から日常の俗事に至るまで、人家に欠かすことのできない諸事をまとめた書であること、俗家、すなわち一般庶民の家庭生活の助けになることを目的としていることが読

みとれる。

続いて目次（目録）を載せたい。末尾の附録八項目を含めて、全体で八十四項目になるが、目録の順番通りに関連のある部分はまとめつつ載せることを試みる。なお、本文には「家作節儉心得 初丁」のように全項に頁数が記載されているが、ここでは頁数は特に関係がないため、目次の項目のみを羅列する。

人家必用小成目録

經濟一斑附日用調法秘事 儉約の大意 家作節儉心得 衣類節儉心得

横麻上下折り切れざる伝 衣類に酒のかかりたるを抜く伝 手

袋めりやす洗い様 衣類に泥の付きたる時

竈徳用向きの造り様 居風呂徳用向き心得 炭のたもち能き伝

棕櫚箒久しく保つ伝 鍋釜類鉄気を去る伝 日傘雨に遭いて壊

れざる伝 煤気たる唐紙を張りてしみの出ざる伝 雪駄水を踏

みてのびざる伝 燈油寒中氷らざる伝 硯水寒中氷らざる伝

寒中新壁をぬりて氷らざる伝 住居向きの湿気を避くる伝 書

物に油かかりたるをぬく伝 書損じの文字を早くぬく伝

石灯籠早く苔を生ずる伝 挿木の秘伝 生えにくき種物蒔きよ

う 花の類遠道を持ちて散らざる伝 梅の花永くたもたする伝

金魚の風をさる伝 盆栽の木の死れかかりたるを活かす伝 病

鳥の手当並羽虫を去る伝 木虱を去る伝 鼠のあるくを止める

伝 竹を斑にする伝

水餅に匂い付けざる伝 煮染物味かわらざる伝 牡丹餅柏餅の

あんかわらざる伝 飯を焚く心得 俄白酒造る伝 塩からき味

噌即時に甘くする伝 常の味噌を白みそと見する伝 山葵の似

せを造る伝 塩引の鮭生のごとくにする伝 干蛸生の如くする

伝 海鼠を夏まで貯えよう 乾海苔暑中まで貯えよう 蛸やわ

らかに煮る伝 竹の子白粉出ざる煮よう 鮎はぜ早く骨のやわ

らく煮よう 蜆のから能くはなる煮よう かんぴよう早煮

あらめ早くやわらかく煮よう 病人に梨子を食べする時心得

醤油のかわりたるを直す伝 熱有る病人に魚類を食する時の

心得

雁瘡の呪い たむしの呪い いぼの呪い 霜焼けの呪い 寝汗

の呪い 脚気の呪い 小兒百日咳の呪い 小兒夜啼きの呪い

舟に酔わざる呪い 小便通ぜざる時の呪い 駕籠に酔わざる呪

い 疫病除けの呪い 産婦えなのおりざる時 風を引かざる呪

い 酒毒を消し溜飲を去る伝 頭瘡にて髪むしりたる時 髭並

び月代やわらぐる方 大便催したるをしばし止める呪い

銭相場便覧 金銀利足便覧 米相場便覧 奉公人給金日割 多

年の年数月数日数閏数を暫時に求むる伝

附録

道普請土坪積もり 新堤築立て土坪積もり 米搗き立て内幾割

減り外幾割減り 反物類裁ち分け小割の値段を知る 金式朱の

銭を直に一匁の銀にする事 金一匁の銭を短法一算にて銀一匁

を知る事五十二丁 金作銀 銀作金 銀作永 永作銀事

地方心得ケ條

人家必用小成目録終

以上が附録も含めた目録の全容である。内容はこの通り多岐にわたり、本書の重要な主題である「儉約の大意」に始まり、衣食住に關わる微細な注意事項や生活の知恵、家庭医学やまじないなど、日々の生活に關わる事項が続き、最後に相場や給金に關する家政經濟的見地からの項目を載せている。また、附録に若干の見積もりと貨幣換算にかかわる項目が見られる。

目録の内容をまとめたものが表一であるが、家事・家政と相場に大きく分類し、家事・家政の中を総論、衣生活、食生活、住生活、病氣治癒、生活一般(生活の知恵)に分類した。また、相場は土木と一般に分けた。表のように分類すると、全八十四項目中、最も多いのは食生活関連の項目であり、二十一項目(二五%)ある。次いでまじない、生活の知恵などの生活一般の項目が二十項目(二三・八%)見られる。住生活に關する項目は相場関連項目と同数の十三項目(一五・五%)である。

住生活関連項目を細分すると、総論、住生活管理、屋内の住環境整備、屋外(庭)の住環境整備に分けられ、項目数の内訳は表の通りである。

本稿では、以下に住生活関連項目を翻刻し、分析を試みる。本書の内容は家事・家政の分野を幅広くまとめており、当時の家事・家政の内容を知るための資料として興味深いものがあるので、いずれ別稿でこれをまとめる機会を持ちたい。

三、「人家必用小成」の住生活関連項目の翻刻と分析

ここでは、本書の住生活関連項目を目録順に翻刻し、解説及び分析を試みる（全十三項目を本書の目録順に便宜上番号を振り、①、②…で表記する）。

①家作節儉心得

人家は小手前にして手堅く造るをよしとす。又屋根は成るべきだけ一棟になりて、谷間の少なきように工夫すべし。谷多ければ屋根に費え有りて、且つ損じやすし。さて又小手前にして無用の座敷少なければ、畳など損ずる費えも少なく、そのうえ少人数にても掃除等行きとどき、又戸鍵の口々も数少なきゆえ、しまり自ずから宜しく、たとえ盗賊来たりて戸鍵をはずさん時にも、手近なるゆえ知れやすし。且つ又屋根に谷少なくて建まえ直となれば、自然と家相宜しく成りて住居勝手も能き道理なり。

予嘗て浦井某と云う名高き家相見に家相の大意を尋ねしに、「家作は番匠の法に任せて棟数少なく谷に無理なく造る時は大い自然の曲尺に叶いて宜しきものなれど、多くは素人了簡をもて、

妄りに便宜の造作なさしむるゆえ、方位の序を失いて、不吉に至る」といへり。是一言にして尽くしたる妙言なり。

それ家作に美麗をいたし、又衣類などに表を飾る事は人情免れざる処なれど、その実は皆人の為にするのみにて、己が益にあらず。家室は身を安居する処のもの、衣類は身の寒からずあつからざる為の品なれば、己が身にさえ事足りなば、外むきを飾るにはおよぶまじきなり。

ゆえに古人も衣は寒をふせぐに足り、居は膝を容るに足らばよかるべしといいおきしなり。それはただ節儉のみにあらず。道理の正しきに従いて意を安うするの法なり。

又台所の流し並びに湯殿はいかにも清浄にすべし。元来不浄に成りやすき場所なれど、下人に任せ至りては行きとどかざるべし。此の両所を清くする時は、家内の人、悪しき疾病をうけずと云う。且つは常々能く掃除してかわかせば、朽ち損じもおそき理にて徳用なり。

そのうち湯殿は成るべき事ならば、石にて流しを造りたるがよし。予三十年前是を作りしが、今に至つてそのよく用いらるなり。火災にあわざれば、子孫に伝えて不朽の徳たるべし。

項目名のとおり、節約して小規模な造作の住まいを造ることを説き、屋根を一棟にし、雨漏りの原因となりやすい谷屋根をなくすことを奨励している。小手前の住まい造りの利点として、屋根、畳に

かかる費用を儉約でき、掃除が行き届き、防犯にも役立つことをあげ、さらに建前が直ちよくになれば「家相が宜しく」なり、住まい勝手が良くなると述べている。

次に、浦井某という「名高い家相見」の言を載せているが、筆者の調べた範囲では五百点を超える家相関連文献のうち著者名が判明しているものの中に浦井姓の者はない⁽⁶⁾。浦井某は家相文献をものする類の者ではなく、町の家相見かと推測される。この人の言には、大工に任せて自然に造れば自ずと家相も良くなるが、大抵は素人に見て造作するために不吉な住まいになるとあり、無理のない住まい造りを奨励している。

最後に水回りに言及し、台所の流しと風呂を乾燥させ、住まいの湿気を去り清浄に保つことで病を招かないようにと説いている。

② 竈かまど徳用向きの造り格よう

竈は築立てにしたるが火の用心の為によく、且つ損じおそし。又竈のふちしろは大小ありて数多きが徳用なりと云う。その訳は鍋釜に大小あれば、広き竈へ小なるものをかければすき多くして、火気洩れ、竈狭きへ大なる物をかければ底高くして火気とどき兼ねるゆえ、薪に損あり。

されど手狭の家にて数多に竈を造る事成しがたきゆえ、近年世に用ゆる古釜の鑊つばと云うもの大小三通も用意すべし。鍋釜の大小に随いて引きかえ用ゆれば、火気洩れる事なし。又総銅竈そうどうこを徳

用とおもうは誤りなり。是は見体ばかりにて却って薪の費多し。三口竈ならば分銅の銅竈二つ用い、二口竈ならば中斗り銅竈にしたるがよし。

但し銅竈は底の角すみに水抜きを付けたるが便なり。又余り厚きは湯のわきおそくして宜しからず。ただ鋳など念入て丈夫造りなるを選むべし。

ここで言う竈とは、土をつき固めた竈と銅製の竈(銅壺)のことであり、どちらも鍋釜の寸法に合わせるよう釜の鑊つばの大きさを調整し、火気が洩れず、薪を損じないようにと説いている。

③ 居風呂すえ徳用向き心得

世に大坂風呂(或いは五右衛門風呂とも云う)というもの徳用第一なれど、無人の者などは手がえしに不便なる事あり。是に次いで徳用なるは、鉄炮風呂の鉄造りなるがよし。(鉄造の鉄炮常並の鉄物屋にはなし。□岸嶋に一二軒費場あり)

最初水よりわかし立てる迄は薪木を入れて焼かるるゆえ、わき早し。但し屋根ひきし家にては、口に瓦一枚を載せて置きたるがよし。さて湯と成りては常の銅鉄炮あがねてつぽの如く炭火にして火見ざるよになすべし。

又並の二口なる焼風呂になさば、上口のうえに二重棚のごとくその通いを付けたる造りの釜近年よくあり、至ってわきまくして

徳用なり。又鉄砲風呂にても、ただの焼風呂にても火勢を強くして急にわかさんとする時は、古き提灯を釜の口におしあててあおるべし。忽ち能くもゆるものなり。

家庭の据え風呂についての記述である。木製の桶の底に鉄や銅製の筒を入れ、そこから火を焚く鉄砲風呂の用い方と、薪を節約するための工夫や、風呂を焚く際の鞆ふいこの役目をする古提灯の使い方など、主に風呂を沸かす際の注意点や知恵について述べている。

④炭のたもち能き伝

俵のまま上より水を多くかけおきて遣うべし。格別たちおそくそのうえ手につかずしてよろし。是も節儉を用いば、夏より秋の始めまでに多く買いおくべし。よほどの益あり。

炭を長く保つには予め水を掛けおいて、一時に勢い良く燃えすぎないようにすること、冬になる前に炭をまとめ買いすることを奨励し、節儉につとめることを説いている。

⑤棕櫚箒久しくたもつ伝

最初より中程を細きしゆるなわにてあみて遣えば、毛こごらず、又塩水を吹きかけて遣えば切れおそしと云う。但し是も直安ちかきを
用ゆるは損なり。式勿しき以上なるをよしとす。

棕櫚箒を長持ちさせるには、最初から中程を結わえ、塩水を吹かけて切れないようにし、また二匁以上のあまり廉価ではないものを選ぶようにと説いている。

⑥煤すす気たる唐紙の上を其よく張りてしみの出ざる伝

生洪きしほを引きかわかして後に張るべし。

煤けた襖を貼り直す時、シミが出ないようにするためには、搾り取ったままの柿洪を塗り、乾燥してから貼るようにと説いている。

⑦燈油とうあぶら寒中氷らざる伝

荏えんの油を少しさして遣えば氷ることなし。

寒中の燈火には、荏胡麻の油を差すことにより、氷りにくくするという知恵である。

⑧寒中新壁を塗りて氷らざる伝

蕃椒とうからしをきざみてすたのごとく多く入れてぬれば氷らずという。古壁の土を半分まぜれば猶よろし。

すたとは壁すさのことであり、壁土に混ぜて亀裂を防ぐ役目の刻

んだ藁などを言う。ここでは、寒中にはこれに唐辛子を多く入れ、古壁の土を半量使えば氷らないと述べている。塗り壁の水分が寒中に氷らないための工夫であり、壁土としてこなれた古壁の土と、つなぎとしての唐辛子の効用を説くが、真偽のほどは知れない。

⑨ 住居向きの湿気を避くる伝

畳の下に竹の皮を一圓に敷くべし。箆笥など常におく処は畳ややもすればしもげやすし。竹の皮を多く敷き入ればその患いなし。

床面の湿気除去に関わる項目であり、箆笥の下が特に通気が悪いため畳が腐りやすくなることへの対策として、畳の下面に竹の皮を敷くことを奨励している。畳の下に古新聞紙などを敷く方法は現在でも畳の湿気除去の方法として行われているが、竹の皮は筥や草履などの材料にもなり、また食品を包みもするので、湿気除去の他に衛生的な効用も期待しての選択かとも推測される。

⑩ 石燈籠早く苔を生ずる伝

挽茶を水にてとき、石にぬり付くべし。能く苔を生じるものなり。又早く厚苔を付けたく思わば、燈籠を日陰におきて苔を大へがしに栽えつけ、馬糞を水にときて度々そそぎ拭くべし。必ず根をはやく生じて取り付くものなり。

石燈籠に苔を早く生えさせる技について特筆することは、庭の造作における石燈籠の好ましい姿を示しているが、石燈籠に水気を多く保ち、尚かつ苔が生える拠り所となる栄養を与えよということかと推測される。

⑪ 挿し木の秘伝

赤土を膠にて能くねり、そぎ口に団子のごとく玉に付けらるべし。大ていは根をおろすなり。又方そぎ口を中より少し割きてそこへ雪駄の古草を薄くして少しく狭く栽ゆべし。又方生大根を一寸程に切りてそれに枝をさしてうえたるもよしと云う。

皆指枝に当分水をあげさするしかたなり。但しいづれにもしばらくのうちは、毎日水をそそぐがよし。素人の心得には指木というゆえ、むたいにそぎ口を土にさし込むものあり。それにては皮ただれて根を出しかぬるなり。

さて挿し木にすべき品は、薔薇の類、梔子、棟棠、黄梅、臘梅、石榴、桃、櫻、楊柳、瑞香、木槿、芙蓉、葡萄、柚、柑類、山茶類、皆活きやすし。大抵春分前後を宜しと云う。もし挿し木にないかぬるものは、取り木にすれば活きやすし。

庭の樹木を挿し木にする方法について述べている。赤土と膠、雪駄の古草、大根などを用いて根を張りやすくする生活の知恵が示されると共に、水やりや挿し木にすることが可能な樹種、挿し木に良

い季節などが記されている。これらの庭木の種類には、花や実を楽しむ樹種が多いことが認められる。

⑫ 生えにくき種物蒔きよう

檀獨の如き堅き実は、小刀にて上皮を削りて蒔き、そのうえ水をたえず掛くべし。又牡丹、桜草などは取り蒔きといて、実ののりたらば直ぐにそのまま蒔き付けるたるがよし。又縷紅草などは蒔き付けより朝夕水の絶えぬほどにそそがざれば、たとえはえても時節おくれて花の咲かぬうちに秋冷を催して、いたづらに開きかぬるものなり。うちすておけばその年生えずして翌年おもいよらぬ時生ずる事あり。

又刀豆は蛤貝を一つづつかぶせて蒔けば、くさる事なし。又空豆などは三日ばかり水に漬しおきて蒔くべし。芽を出す事極めてはやし。餘はこれに準じて差略すべし。

種まきの庭木、草花の生えにくい種類についての注意が記されている。檀獨とは檀特（曇華）のことであり、カンナ科の多年草、また縷紅草はヒルガオ科の蔓性一年草であり、両者とも観賞用に栽培される。鈍豆、空豆についても芽を出しやすくする知恵について言及している。

⑬ 盆栽の木の死れかかりたるを活かす伝

木をぬきて土をふるいおとし、日にさらす事一日、さて其の根を溝の中に一夜浸し再び合わせ、土を入れかえて栽ゆれば、必ず蘇生するものなり。六七月炎暑の時なればいよいよ験あるなり。

盆栽の木を蘇生させる方法であり、土を入れ替え根に水分を含ませることを奨励し、夏期の水やりへの注意を促している。

四、『人家必用小成』の住居関連部分を示すもの

以上が住生活関連の全十三項目である。世相を反映してか、住まい造りや生活に際しての節約を説く項が多いことが分かる。本書では、①②③④⑤の項目がこれに該当する。天保八年前後には、先述したように米価高騰による窮民救済事業も行われた一方で、身分不相应の贅沢を取り締まる禁止令や風俗取り締まりの法令が多数出されもした⁽⁷⁾ことを鑑みると、本書の説く「節約」は、「分相应」と同義であると考えられる。

同時代の家相文献にも、分相应の住まい造りを説くものは見られ、天保十一年（一八四〇）刊行の『家相秘伝集』では、著者の松浦琴鶴は身分に応じた住まい造りを説き、「官者凡下の分を守りてそれ相应に営むべし」と述べている⁽⁸⁾。

家事・家政の書である本書における家相説の扱いをみると、本書では小手前な住まい造りがひいては家相をも良くしていると説き、家相を整えることへの志向が伺える。また浦井某という家相見をあ

げ、家相見の言を自説の裏付けとして記述している点も興味深い。

同様に住まい造りの際の湿気除去への配慮も、同時代の家相文献では主題の一つに掲げられるものであり、家相文献の多くは住まいの風通しを説き、水回りや住まいの中央部分の湿気除去を繰り返して説いている。先述の『家相秘伝集』では、「天井とは、世俗に言う中庭落庭のことなり。この所に樹木水溜まり湿気の類を設くること、大いに凶し。」と言い、中庭の湿気除去を奨めている。

高温多湿の日本の風土の木造の住まいを鑑みれば当然の配慮であり、庶民の住まいづくりでは欠かせない注意点であったことを示すが、これは言うまでもなく当時に限ったことではなく、十分現代にも生かされている住まい造りの基本事項である。本書では、住まいの湿気除去について①⑨の項目で言及している。

以上のように、分相応な住まい造りや湿気除去などの点で、江戸時代中、後期の家相文献と類似した記述が本書にも見られることが明らかになった。これにより、家相文献が独り迷信に固執した占いの書としてあるのみではなく、同時代の家事・家政書に見るような住まい造りの指南書という面も併せ持つことが確認されたと言える。

その他にも、竈や風呂など水回りの仕様、寒中の塗り壁（現代であれば寒中コンクリートの仕様への言及を意味する）や襖の張り替え、庭の造作など、身近な住生活に関わる教えや生活の知恵がまとめられている。これらには、⑥⑦⑧⑩⑪⑫⑬の項目が該当する。

中には応急処置的なものや古くからの言い伝え、迷信に属する類も見受けられるが、台所、風呂、座敷、庭など住まいの場所別に、或いは夏期、冬期の季節別に、住まいの何が問題になり、それに如何様に対処したのが明らかになった。

結語

『人家必用小成』の住居関連部分の内容を総合すると、それは住居設計計画学、居住環境計画学、住居管理学、住居材料学、造園学などを網羅し、住居学そのものである。

また、本書には本稿で取りあげた項目の他にも、天保八年当時の米相場、銭相場、奉公人の給金相場なども載せられており、家政経済学に相当する部分もある。食生活、衣生活、生活一般と病氣治療を含めた本書全体の構成をみると、家政学全般を含んでいることが知れ、本書を一覧することは本邦における家政学の根源探索にも資すると考えられ、一層興味深く感じられる。

筆者はこれまでに同時期の家事の書を他に二書ほどしか見ていないが⑨、家事の書の住居関連部分に記される内容は、二書を見る限り本書のものと大きな相違はない。今後はより多くの文献を照査することにより、当時の住まい像や住まい観を明らかにしたい。（本稿は平成十四年度科学研究費補助金の助成を得て作成している。）

註

- (1) 衣食住を含む日常の家事、家政に関わる諸事をまとめた書籍を一般に家事、家政の書と呼ぶ。江戸時代後期であれば、一家の家政を取り仕切る者（多くはその家庭の主婦、主人であるが、家政を任された家臣や使用人の場合もある）が持ち、必要なときに読んだものと推測される。
- (2) 江戸時代中、後期の家相文献流布の状況については、筆者は本紀要第三十六集において家相流派の祖、松浦東鶏の活躍について記している。詳しくは拙著『江戸時代の家相説』（一九九九・雄山閣出版）を参照されたい。
- (3) 本稿では『補訂版国書総目録』（一九六六・岩波書店）を参照している。
- (4) 例えば苗村三敲『相宅小鑑』（享和一年・一八〇二）や、松浦東鶏『匠家故実録』（享和三年・一八〇三自序、文化五年・一八〇八江戸にて刊行）も須原屋を通して江戸での書籍の販売をしている。
- (5) 本稿では『国書人名辞典』（一九九六、岩波書店）を参照している。
- (6) 江戸時代の家相関連文献数の詳細については、村田前掲書（一九九九）を参照されたい。
- (7) 天保七年には、身分不相応の贅沢をした科により、札差が手鎖の刑に処せられ天保八年には、米価高騰で住民が困窮しているため、普請や物見遊山を自粛するようにとの触れが出されている。また天保九年には、各種奢侈禁止、風俗取り締まりに関わる法令が多数出されている（何れも吉原健一郎他編『江戸東年表』一九九三・小学館より）。
- (8) 『家相秘伝集』は、村田前掲書（一九九九）に翻刻を載せている。
- (9) 村田あが「江戸時代中・後期の住まいについての研究（第二報）『三事略考』（一九八九・東京家政学院大学紀要第二十九号）、村田あが「江戸時代中・後期の住まいについての研究（第三報）『日本居家秘用』について」（一九九〇・東京家政学院大学紀要第三十号）の二つの報告において、家事の書における住まい方の諸事項についてまとめている。